

総合的研究が文化コースの基本的取り組みである。もとより、総合化は、自由な発想からの学生の役割である。

次に各講座の研究・教育の内容を、別表カリキュラムと併せて示したい。

文化動態講座は、先進国、途上国を含めて、それぞれの地域へ展開する広義の文化の歴史的發展や地域的展開などに関して、グローバルで、かつ、動態分析的な視点からの研究教育を目指す。

従って、研究対象は、マクロには、文化の発展と変容であり、ミクロには、人々の生活そのものである。提供するプログラムは、各般にわたるわが国の近代化の過程と現状の実証的研究、異文化間の接触やそれによる文化変容、それぞれの地域に即しての社会・経済の変容や現状、農村―都市間や国際的な人口移動、政治・経済活動を中心とした国際関係、文化メディアの意義や役割など、多面的な網羅を目指している。

文化動態講座のユニークなプログラムに、「文化動態論実習および現地調査」がある。ここでは、文献研究や統計分析などの技術の修得をふまえて、現地での調査研究を実習する。前期は国内のフィールドで、後期は海外へ出かける予定であるが、留学生を含めて、なまの体験が、将来必ず役に立つものと考えている。

アジア文化講座では、そのスタッフが旧アジア地域研究からシフトしたこともあって、アジア地域の文化を軸にした地域文化研究を目指す。それは、三つの歴史的文脈を擁する地域であり、それらの下位文化圏が、社会・経済・諸文化のシステムの基本的性格を形作っているが故である。

具体的には、思想や文学を中心とする文化基盤、ナショナル리티やエスニシティを視点とした十九世紀以降の国家の形成や変容、文化、政治・経済、社会などが包含する地域の構造や変容の分析などがあげられる。

文化コースでは、研究・教育環境の未整備の中で、教官・学生一丸となって、新しい芽を育てる意気に燃えている。大方のご配慮とご支援を願うや切である。

(むらかみ・まこと)

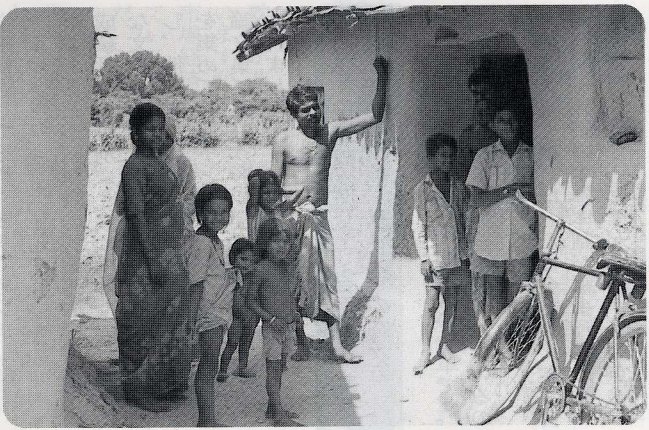
博士課程前期		博士課程後期	
授業科目	教官名	授業科目	教官名
異文化間コミュニケーション論	村上 誠	文化動態論特別講義	村上 誠
日本文化論	三宅 昭宣	アジア文化論特別講義	村上 誠
経済文化論	三宅 昭宣	文化動態論実習	村上 誠
地域社会論	三宅 昭宣	アジア文化論特別講義	村上 誠
地域間文化論	三宅 昭宣	文化動態論実習	村上 誠
国際文化論	三宅 昭宣	アジア文化論特別講義	村上 誠
文化メディア論	三宅 昭宣	文化動態論実習	村上 誠
文化動態論実習・現地研究	村上 誠	アジア文化論特別講義	村上 誠
アジア地域文化論	村上 誠	文化動態論実習	村上 誠
アジア社会文化論	村上 誠	アジア文化論特別講義	村上 誠
政治文化論	村上 誠	文化動態論実習	村上 誠
宗教学文化論	村上 誠	アジア文化論特別講義	村上 誠
漢字文化論	村上 誠	文化動態論実習	村上 誠
現代中国文化論	村上 誠	アジア文化論特別講義	村上 誠
アジア動態地誌	村上 誠	文化動態論実習	村上 誠
地域社会変容論	村上 誠	アジア文化論特別講義	村上 誠
多民族社会論	村上 誠	文化動態論実習	村上 誠
文化動態論実習	村上 誠	アジア文化論特別講義	村上 誠
アジア文化論特別講義	村上 誠	文化動態論実習	村上 誠
		文化動態論特別講義	村上 誠
		アジア文化論特別講義	村上 誠
		文化動態論実習	村上 誠
		アジア文化論特別講義	村上 誠
		文化動態論実習	村上 誠
		アジア文化論特別講義	村上 誠
		文化動態論実習	村上 誠
		アジア文化論特別講義	村上 誠
		文化動態論実習	村上 誠



▼ベンガルの農村 (筆者撮影-1992年)



▼開発を待つ? 上海浦東 (筆者撮影)



▲インドの農家 - UP州の農村にて (筆者撮影-1991年)



▲ヒンズーの神々 - インドUP州の農村にて (筆者撮影-1991年)

国際協力研究科「文化コース」

真のアジアの理解をめざして

大学院国際協力研究科 文化コース主任 ◆村上 誠

いきなり私ごとであるが、三年ほど前の社会科学部国際社会論専攻の教官会で「国際協力研究科」の話聞いた時、脳裏をよぎったのは、「大東亜共栄圏」や「東亜地政学」などの悲しい過去であった。

どういふことか、幾つかの曲折を経て、自分自身にお鉢が回り、国際協力研究科への移籍を決断しなければならなくなった時、改めて、「悲しい過去」からの脱皮を明確に再認識する必要性に迫られた。

そして、日本のこれからの国際協力は、「軍事力」(地政学がこの語をそのまま使ったのではないが)を「経済力」にそのまま置き替えただけではいけない。「開発効率」のみに走ってはいけない。これからの国際協力に求められるものは、「各々の民族と文化の尊重」の上に、「対等で平和な協力」である。

ここにこそ、国際協力研究科教育文化専攻設立の意義があると思ったのである。「まがき」が長すぎたが、ともかく、平成七年四月、国際協力研究科の二番目の専攻として教育文化専攻が開設され、文化コースは、その一翼を担うことになった。文化コースには、文化動態講座(専任教員三名、学内兼任教官二名、学外非常勤講師三名)とアジア文化講座(専任教員五名、学内兼任教官一名、学外非常勤講師二名)の二講座が置かれることになり、四月に九名(うち留学生二名)の新入学生を迎えた。

学生の指導は、コース内はもとより、教育文化専攻で一体的なシステムをとり、開発科学専攻とも壁はない。

さて、次に文化コースが国際協力研究科の中で何を指し、何をしようとしているかについて示す。これをひとりで言う、「自助努力を基準とする途上国の発展を支える学術文化の振興」と「指導的人材の養成」という新しい開発協力の理論と方法の希求であり、本コースの設立の基本的目的もそこにある。

こうした目的から、文化コースの「文化」は、広義の文化でなくてはならない。それぞれの国や地方に生成したきた言語や宗教などの文化、社会・経済諸活動、村落や都市などを含めたトータルとしての地域文化である。そして、その学際的、